

自然と歴史につつまれた巨樹物語

9月号からは「自然と歴史につつまれた巨樹物語」というテーマで、県内の巨樹について掲載してまいります。地域に響いた巨樹には古くからの言い伝えがあり、地域の人人から尊敬されています。また、巨樹の姿、或いはその周りの自然環境から、かつての自然を彷彿とさせるものを感じています。そのようなことについて、「石川県巨樹の会」の会員により筆を続けていきたいと思っており、よろしくお願い致します。

私は本会初代会長の里見信生先生に入会を勧められ、入会してから30年余りになります。若いころから植生地理学に興味があり、そのような視点で巨樹を見つめてきました。

今回は巨樹物語の本編に入る前に、巨樹から何が見えるか、その一端について述べさせていただき、次回へとつなげて行きたいと思っています。
○巨樹の構成樹種から自然植生との関連を試みる

福井県から新潟県までの各県の巨樹の構成種は、どのような樹種で構成されているか、その構成種は、日本の自然植生を反映しているのだろうか、何気なく考えていた頃があ

った。思い立って少々データは古いですが、第4回自然環境保全基礎調査の「巨樹・巨木林調査報告書」(環境庁、1991)をもとに試みることにした。なお、巨樹は、地表から1.3mで幹周が300cm以上の樹木と定義されている(環境庁、1991)。

北陸(福井県から新潟県まで)では、各県、巨樹までに成長する最も多い樹種は、共通してスギである。スギは、各県に430本余りそれぞれの県内に広く分布している。しかし、新潟県の場合、本数では1220本と他の3県の群を抜き、およそ2.8倍多いが、これは、県土の面積が広いためであると思われる。

石川県の天然記念物に指定された巨樹スギの多くは、アシユウスギである。雪の重みにも折れず、垂れ下がって着地した枝から発根して伏条更新する性質がある。北陸の多雪地帯に適応したものと思われる。オモテスギと異なる性質をもっている。

能登半島外浦に着地した枝から発根したと思われるスギから1つのスギ林が形成されたのではないかと思われる林地がある。すなわち、クローンのアシユウスギ林である。

本県では次いで多い樹種はスタジイ、タブノキと常緑広葉樹が続く。暖温帯の主要構成種であり、植生帯の優占種である。この傾向は、福井県とよく似て巨樹の上位にランクされているが、富山県・新潟県ではスタジイ、タブノキの巨樹数は、激減しており、各県の常緑広葉樹種の巨樹数は、次表の通りである。

樹種	福井県	石川県	富山県	新潟県
タブノキ	137	134	9	8
スタジイ	133	342	11	10
シラカシ	16	0	0	5
ウラジロガシ	6	24	8	5
カゴノキ	3	0	0	0
アカガシ	0	8	0	0
モチノキ	0	9	0	0

(数字：本数)



スタジイ (金沢城本丸跡)

一方、ブナクラス(冷温帯)のチシマザサ・ブナ群集やジュウモンジシダートチノキ群集の標徴種のブナやトチノキの巨樹は、富山県を境にして北にその数が増加している。このように巨樹の構成種の

本数の多さの推移を見ると、常緑広葉樹や夏緑広葉樹が海岸線に沿って日本海を北上する対馬暖流の影響を受けながら次第に数を減少、あるいは増加させている。

県単位のスケールで見ると、石川県と富山県を境にして常緑広葉樹や夏緑広葉樹も大きく変化することが読み取れる。タブノキ・スタジイやブナ・トチノキの増減から北陸地方は植生帯の上から暖温帯(ヤブツバキクラス域・照葉樹林帯)から冷温帯(ブナクラス域・夏緑樹林帯)へと移行する地域にあることを示している。このことは、自然植生の水平分布図と一致している。

(県巨樹の会 高木政喜)

山林協会からのお知らせ

今年度の「石川県山林大会」を次の通り予定しています。

日時 令和2年10月14日(水) 13:30~
 場所 のとふれあい文化センター
 ター (穴水町)

内容 表彰、意見発表、大会決議など

また、本会代議員会を同日11時から同会場で開催します。